

大庭 奈々

今朝方からどんよりとした雲が空を覆っていたので、私は居間の一角に洗濯物を干した。雲は今にも落ちてきそうな様子で、案の定、昼前からじつとりとした雨が降り始めた。

ふいに蟹が食いたくなくなった。

いちど思い立つといけない。どうしても蟹を食べなければならぬような気がしてくる。

奇妙なことに、そういうときに冷蔵庫を覗くと、わずかばかりの野菜の中に一杯の蟹がうごめいていることがよくある。

昼頃に友人が二人やって来て、蟹鍋を食うことになった。

私の手つきがそうとう危なっかしく見たのだろう、友人の女性が蟹の下処理を買って出してくれた。彼女は手際よくベリベリと音を立てて蟹の皮を剥がしていく。蟹を少し気味悪く思っていた私は、台所は彼女に任せることにして、白菜を買いに出かけることにした。もう一人の良介は戸締りを見にいったあとから姿が見えない。

街は下から煙ぶったかのように視界が悪い。先ほどから冷たい風も吹き始めて、霧のような雨が右へ左へと揺れている。

どうにも足が重たい。

あの蟹を見たせいかもしれない。

八百屋へと続くだらだらとした坂が、いつもよりも長く、道幅も狭く感じられる。ときおり人とすれ違うものの、雨のせいかな顔が見えない。影が濃い。なんだか気味が悪くなってきた。

やっこの思いで分かれ道を右に曲がると、突き当りにぼんやりとした八百屋の軒先が見えた。店頭には人の頭

ほどの白菜がぞろりと並んでいる。

主人の姿はなかった。もしかしたら奥の床の間で鼻提灯を吹かしているのかもしれない。

「もし」

返事はない。

「もし」

今度は先ほどよりも大きな声を出したが、店の奥は静まりかえっている。主人が起き出してくるような気配もない。

雨はますます強くなってきていて、しだいに服まで濡れてきた。私は仕方なく手ごろな白菜を手にとると、金を置いて帰路についた。

「おかえり」

「ただいま」

「ちょうど準備が終わったとこだよ」

「蟹もかい」

「白菜は」

「え」

「白菜だって」

「白菜、てなんだ」

「いま手に持ってるやつ」

「ああそうか」

私はそれを彼女に手渡した。

それは店を出た時よりも水を吸って大きくなっていった。

「良介は」

「戸締りを見にいったよ」

「そうか」

風が強くなってきた。

さっきから戸がガタガタと音を立てている。

いつもより電灯の影が濃い。

あれはちょうど今日のような、人の判別ができないような重苦しい雨の日のことだった。こんな日は何をやる気にもならないと、私は床の間で寝っ転がっていた。ひと眠りしようとも思ったがどうにも寝つきが悪い。

雨は昼頃になるとより一層強さを増してきた。風がびゅうびゅうと吹いていて、戸がガタガタと音を立てて鳴っている。いちど気になってしまつと良くない。何をしなくても耳に障る。

ふと戸締りをしたか気になった。

したような気もするし、していないような気もする。

ただ、起き出して三和土に向かうのも面倒くさい。

逡巡しているうちに、戸の鳴る音がぴたりと鳴りやんだ。おや、と思つて耳を澄ましていると、今度は勝手口の方でガタガタと音が鳴りだした。

ふと思つた。

まるで何者かが、家に入ろうとしているようではないか。そんなことが頭に浮かんだ途端、背筋がうすら寒くなった。

床の間から起き出して家中の戸締りを確認する。

不思議なことに、あれほど騒がしかった勝手口は、近づいた途端静かになってしまった。そして今度は、二階

の奥の方からガタガタと音が鳴り出した。

こういつたことが何度か続く。恐る恐る二階の寝室に行けば、隣の部屋が鳴り出す。隣の部屋を覗けば一階から音がする。

実に気味が悪い。

それでもどうにか粗方の戸締りを確認して、床の間へ戻つてみてギョツとする。

窓のところに黒い影がへばりついて、ガタガタと網戸を揺らしている。

つんと蟹の匂いが鼻の奥をつく。

濛々とした湯気が鍋から出ている。鍋で煮られた蟹は無残にも八つに千切られていて、それでいてまだ少し動いている。蟹が生きたまま千切られたことを思うと、厭な気持になった。

彼女は黙つたまま蟹を見つめている。食べようとする気配がない。部屋の中が急に寒くなったような気がしてきた。今までも肌寒くなかつたわけでは無いが、辺りは冷や水を被つたかのような静けさである。

黙っていると、鍋の煮える音だけがする。

なんだか怖くなつてきて、私はおそろおそろ彼女に尋ねた。

「良介は」

「戸締りを見にいったよ」

「そうか」

なおも彼女は黙つたまま蟹を見つめている。やはり食べようとする気配はない。

小さいころ、小さな蟹を殺したことがある。

浜辺を無造作に歩いていたらところを捕まえて、足を一本一本確かめるように千切つていった。なんだか首を括つているようだと思つた。人が首を括るところを見ているような気がした。

あれはなんとという蟹だったか。

そうだ。そのことで良介と喧嘩になったのだ。私はスナガニだと思つたが、彼はシオマネキだと言ひ張つた。

揉み合いになつて、私は彼の頭を石で何度も殴つた。

彼の頭は柘榴のようにぱっかりと割れた。

「なにか言つた」

